

山と博物館

第52巻 第7号 2007年7月25日

市立大町山岳博物館



マーキングした甲虫(カナブン・シロテンハナムグリ)を放す子ども達 文・写真 清水博文

里山の甲虫調査

捕獲したカブトムシやクワガタムシなどの甲虫の背中に、電動ヤスリを使い文字や数字のマークをつけ再び野外へ放し、マークのついた甲虫を再び捕獲して個体の行動範囲などを調べることで、自然環境を把握する基礎的なデータを収集することができます。

この調査は、平成十六年より博物館と山岳博物館友の会のサークル活動のひとつである「こども探検クラブ」の会員が、「長野県環境保全研究所」との協働研究として実施してまいりました。平成十七年度からは、市内小学校の総合的な学習や、理科クラブでの活動としての参加もされるようになりました。

長野県の事業が終了した平成十八年度からは、当館と友の会、市内小学校とで継続調査を行い、本年度では、市内小学校全校での取り組みという形に至りました。学校により総合的な学習の時間に対応するところ、理科の授業の一部として、クラブ活動などさまざまな形態の違いがありますが、市内小学校全校が同一の調査を実施するというにより、各学校間との情報交換など交流も深まることも期待されています。

昆虫が苦手だった児童が、身近な環境に生息している甲虫に実際に触れたり、昆虫が好きであるが、今までのようにただ虫を捕まえ飼育するだけでなく、調査活動に携わり、教科書では得られない経験を通して、身近な自然環境について考えるきっかけになればと思います。

クラブ活動やクラス単位など各学校内では少人数での取り組みですが、この調査について校内放送などを通して全校児童への調査協力の呼びかけを行うとともに、市広報などからも、市民へのマークのついた甲虫の情報提供協力をお願いを行っています。まちぐるみでの参画へと期待しています。

企画展「よみがえる高嶺の草花」

——志村鳥嶺 旧蔵植物標本——
近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物（後編）

市立大町山岳博物館

写真と鳥嶺

最初の白馬登山で「2ダースほどの写真を撮った」と鳥嶺は述懐している。現在では想像もつかないことであるが、明治30年代後期のカメラは組立暗箱式であり、機材一式で1貫目（約3・75kg）、感光材はフィルムではなくキャビネ判（約16・5×12cm）のガラス乾板、36枚（3ダース）でやはり1貫目、2。

明るい光のもとでも露光に30分以上、後処理までに1枚1時間以上を要し一日6枚撮影が精一杯、写真機材だけで一人の荷担ぎを雇わなければならなかった、と聞けば理解できるだろう。鳥嶺が愛用した、ドイツのゴルツ社ダゴルレンズは、鳥嶺の月給の2ヶ月分、115円という高価なものでもあった（※1、2）。

「山岳写真」を「山岳（高山）」におもむいて撮られた写真、その写真を撮影した人を「山岳写真家」と単純に定義したとして、わが国初期の山岳写真家を以下に列記する（※3）。

・松本、保里写真館の技師、安藤鶴一郎 明治29（1896）年にロンドンで出版されたウォルター・ウェストンの『日本アルプスの登山と探検』に、明治27年以前に撮影したと推定される写真が掲載されている。

・高頭式・武田久吉・高野鷹蔵・辻村伊助・石崎光瑤・近藤茂吉・辻本満丸・三枝威之介・加山竜之介・武井真澄・河野齡蔵・志村鳥嶺・岩村円・青木紫嶺・八木道之助・石田常平

上記の人々は、明治38（1905）7月出版の小島鳥水『日本山

水論』、39年2月出版の高頭式編『日本山嶽志』、39年4月に創刊された日本山岳会の機関誌『山岳』の初期の号、明治43年から大正6年まで高野鷹蔵編集で日本山岳会から8集出された写真集『高山深谷』などに作品と名が登場する人物である。

いずれも鳥嶺同様の苦労のもとで作品を成したことであろう。鳥嶺に関しては、明治37年の第1回白馬登山で得た写真をいち早く園芸雑誌に発表し、それを契機に鳥水の『日本山岳論』や高頭の『日本山嶽志』、『山岳』創刊号の口絵を飾り、さらにはウェストンの手に渡って英国山岳会の機関誌『アルパインジャーナル』第23巻171号（明治39年2月発行）に杓子岳の写真が載るなど（※4、5）、急速に山岳写真家の地歩も固めることとなる。

写真自体が貴重な当時、白馬をはじめ、読者のほとんどが未知の「山岳（高山）」を説明する時、「山岳写真」は大変な説得力をもつ希少な媒体であった。鳥嶺も「写真の説得力」を最重視して、山に担ぎあげている。

「とにかく白馬という山は素晴らしいですね。こういう立派な山は他の人にもいっぺん見せてやりたい。ところが持っていてみせ



白馬の絶頂 明治40年8月撮影

るには写真なんです。それからなんです。写真をやりはじめたのは。」（※1）

自著、明治40年7月刊『やま』（前田曙山共著）、明治42年3月刊『高山植物採集及培養法』、大正2（1913）年9月刊『千山萬岳』に多くの山の写真を掲載したのはもちろんであるが、明治42年の6月と8月に、わが国初といわれる山岳写真集『山岳美観』を2集出版していることは特筆に値する。四ツ切判コロタイプ印刷、各6図、印刷部数各約300という（※1、2）。

（※1）志村鳥嶺ほか口述（1957）『山岳写真創生記』、『岳人』108号

（※2）岩科小一郎（1980）『志村鳥嶺翁のこと』、『やま』復刻版

（※3）杉本誠（1999）『日本の山岳写真と写真家たち』、『山を愛する写真家たち』に多くを負って記述

（※4）志村寛（1957）『日本山岳会創立前後の見聞』、『山岳』第50年号

（※5）中山桃一（1989）『山岳宗徒鳥嶺小伝』



鑓ヶ岳温泉下方 明治38年8月22日撮影

登山と鳥嶺

鳥嶺は明治37年の春から長野市周辺の山々で高山植物採集を重ね、前田曙山の主宰する園芸雑誌によく記事を掲載していた。高山植物栽培の流行によって鳥嶺の知名度は高まり、同年夏以降(推定)には城数馬と知り合い、高山植物や写真を寄贈している(※1)。

一方、同年8月の第1回白馬登山で得た杓子岳の写真は、同じ園芸雑誌に高山植物の記事とともに掲載され、まずウォルター・ウェストンが注目し、その入手方法を小島鳥水に照会した。そこで小島は前田を通じて鳥嶺の了解をとり、上京していた高頭式が小島の依

頼を受けて新潟への帰郷途中に長野の鳥嶺を訪ねたという。それは明治38年4月のことという。この時、鳥嶺は各々に3葉の写真を贈っている(※2)。

城数馬、小島鳥水、高頭式は翌38年10月に設立される山岳会(後の日本山岳会)の発起人となる人々。鳥嶺は高山植物と山岳写真が縁で、急速に日本登山界の仲間入りをする。後の著書『千山萬岳』にウェストンが序文を寄せているのも、こうした機縁による。

山岳会創立直前の明治38年夏、高頭の運営資金負担の申し出に、高頭の人物を疑った城が身元調査に出かけようとするのを鳥嶺が制止して、長野市で三者会談に及んだ。会談中、最初は原稿が集まらぬから山岳会を日本博物学会同志会の支会として発足するという案に、鳥嶺は「自分独りでも雑誌の半分位は受け持つと壮語し」どこまでも反対したが容れられなかった、というエピソードもあった。(※1)。

明治40年代から大正2年頃は著述も盛んで、先の園芸雑誌のほか、単行本、新聞連載等により高山植物の魅力、山岳美、登山行為の普及啓発にあたっている。これは長野中学在職時代の登山家として最も充実していた時期にあたる。

肉筆のメモノート
「山岳」第50年号(1957)に載った「日本山岳会創立前後之見聞」の下書きと考えられる記述など晩年の筆記を主とするノート。
在校生に呼び継がれた鳥嶺のあだ名は単刀直入、「山の志村」、「山アラシ」であった(※3)。
登山歴のうち、明治40(1907)年7月から8月にかけて

の中房温泉・乗越峠・ブナ立尾根経由の鳥帽子岳へ鷲羽岳往復は、「登山者としては初期の縦走形式の登山」であったという(※4)。
大正5(1916)年4月、13年近い長野時代を終え、台湾の台中中学校へ赴任。

自らの新聞記事が中心のスクラップブック『鳥嶺文集』の大正4年の記事「日本アルプス 蓮華の大池(一)」で、葱平を下る学習院の生徒の「現代劇の舞台へでも出る様な」格好を見て嘆き、「自分が始めて登山した頃は麓の林も頂上の草原も全く太古のまゝの自然であつたが此御山も近年は非常に俗になつた」と自分の云ふ言葉の終らぬ内に、人夫は旦那俗だの何のと云つても我等は一人でも登山者が殖えて、一貫でも余計な酒銭が取れ、ばよい。オー始めて此御山へ来た頃は、仙人の様であつた御前達も、情ない根性になつたものだ、ツクツク此山も嫌になつた、年々暑中休暇には、帰省でもする様な気持ちで登山したが、

来年からは「登るまい」と述べている。鳥嶺のそれまでの普及啓発の思いや意図をはるかに越えて、登山の大衆化は急テンポだったようである(※1)。



志村鳥嶺 (83歳)

大正11年台湾から帰国後、北アルプスへは一步も足を踏み入れなかった。その鳥嶺が、車窓から見た後立山連峰に「矢も盾もたまらなく」なり、昭和31(1956)年、家族に無断で41年ぶりに白馬に登っている。82歳にして13回目、最後の白馬であった(※5)。

(※1) 峯村隆「長野時代の志村鳥嶺」、「新・北アルプス博物誌」

(※2) 志村寛(1957)「日本山岳会創立前後之見聞」、「山岳」第50年号

(※3) 志村寛(1955)「高山植物とともに六十年」、「中学時代」4月号

(※4) 山と溪谷社(2005)「日本登山史年表」

(※5) 志村鳥嶺(1957)「白馬五十年」、「岳人」110号

(終わり)

(市立大町山岳博物館学芸員

峯村 隆
千葉 悟志)

博物館だより

本州中部の高山帯に生息しているニホンライチョウは、既に3、000羽以下しかいないと推定されています。

ライチョウの研究・保護・生息地の保全についての最新の成果発表を行う大会が、大町市で開催されます。

今年の特マは「ライチョウと高山環境をいかにして守るか」です。

ライチョウ保護を通して、環境問題や自然環境について考える機会にしたいだけだと思います。



第8回ライチョウ会議長野大会

開催日時：平成19年8月18・19日（土・日）

開催場所：大町市 サンアルプス大町参加費：無料（宿泊・懇親会出席の方は別途必要・要申し込み）

主催：第8回ライチョウ会議長野大会実行委員会

実行委員長：鈴木啓助（信州大学山岳科学総合研究所所長）

共催：大町市・大町市教育委員会

協賛：宝酒造株式会社・信州大学山岳科学総合研究所・NPO法人信州ツキノワグマ研究会・信州野鳥の会・信州ワシタカ類渡り調査研究グループ・長野県山岳協会・

長野県自然保護連盟・日本山岳会信濃支部・日本野鳥の会諏訪支部・日本野鳥の会長野支部・南アルプス研究会・NPO法人信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ・長野県勤労者山岳連盟

後援：環境省・中部森林管理局・文化庁・長野県・新潟県・富山県・山梨県・岐阜県・日本勤労者山岳連盟・財団法人日本自然保護協会・財団法人日本野鳥の会・社団法人日本山岳協会・社団法人日本山岳会・社団法人日本動物園水族館協会・NPO法人ライチョウ保護研究会・NPO法人山の自然学クラブほか（予定・順不同）

問い合わせ

事務局：市立大町山岳博物館

電話：0261-22-0211

FAX：0261-21-2133

大会プログラム

二日目 8月18日（土）

12時00分 受付

13時00分 開会

13時10分 第一部

「ライチョウの生息域内保全と生息域外保全との連携」

座長：村田浩一（日本大学）

野外調査、生息域内保全と生息域外保全の連携と高山環境のモニタリングの必要性について考えます。

「希少種の保護保全について」（環境省）

「山小屋・登山者の変遷など山と人の係わり合いの歴史」（大町山岳博物館・柳澤昭夫）

「ライチョウの感染症と生息環境」（鳥取大学：山口剛士・岐阜大学：福士秀人）

「南アルプス市による登山者アンケート調査の取り組み」（南アルプス市芦安山岳館：塩沢久仙）

「大町市のライチョウ飼育の取組みと今後の計画」（大町山岳博物館：宮野典夫）

「日本動物園水族館協会による種の保存計画」（上野動物園：小宮輝之）

「コウノトリをシンボルとしたまちづくり」（豊岡市：佐竹節夫）

17時10分 総合討論

17時40分 閉会

18時30分 懇親会

二日目 8月19日（日）

9時00分 受付

9時10分 開会

9時20分 第二部

「高山に何が起きているのか」

座長：鈴木啓助

シカなど野生動物の高山進出の問題などライチョウのおかれています現状を把握します。

「氷河期からの高山植生の変遷と現在の高山環境」（東京学芸大学：小泉武栄）

「南アルプスにおけるシカの食害について」（中部森林管理局：元島清人）

「シカ・サルなど野生動物の高山への侵入について」（信州大学：泉山茂之）

「高山昆虫の現状について」（信州大学：伊藤建夫）

「高山環境の現状と地球温暖化問題」（信州大学：鈴木啓助）

11時45分 総合討論

12時30分 昼食

13時30分 第三部

「ライチョウの保護と高山環境の保全」

座長：鈴木啓助

カナダの研究者より世界に生息しているライチョウと日本に生息しているライチョウの生息環境の差異などを比較した基調講演（通訳あり）のあと、いま日本の高山がどのような状況にあるのかを把握し、なぜ今、ライチョウを保護することが重要なのかについて考えます。

13時30分 基調講演

「ライチョウの個体数の現状について」（信州大学：中村浩志）

14時05分 基調講演

「世界のライチョウ生息地と比較した日本の高山環境について」（カナダ プリティッシュ・コロンビア大学：キャシー マーチン）

15時10分 パネル討論

「ライチョウと高山環境をいかにして守るか」

パネリスト：キャシー マーチン・小泉武栄・泉山茂之・中村浩志・鈴木啓助（環境省・中部森林管理局・長野県・大町山岳博物館）

16時40分 閉会

※なお期間中会場にて、関係団体等のボスター展示も行います。

山と博物館 第52巻 第7号

発行 千 388-0002 長野県大町市大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 0261-22-0211

FAX 0261-22-0211

E-mail: sanpak@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak/

印刷 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）

郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七一一三九三